

学校の概要（平成15年4月現在）

学校名	軽井沢町立軽井沢中学校					
学年	1年	2年	3年	特殊学級	計	教員数
学級数	4	5	5	2	16	30
生徒数	149	165	166	9	489	

実践研究の概要

1. 主題（テーマ）

生徒一人ひとりが自ら学び、学び合う喜びを実感できる学習指導
～個に応じた指導の工夫改善を通して～

2. 内容と方法

(1) 実施学年・教科

- 1・2・3年 数学（個により習熟の程度の差が生じやすい教科であるため）
- 1・2・3年 英語（個により習熟の程度の差が生じやすい教科であるため）
- 1・2・3年 総合的な学習（本校では総合的な学習を軽井沢の自然・文化・産業に関わるテーマを持ち、世の現実に学びながら自らの追究を進める『軽井沢学』として位置づけているため）
- 2・3年 選択教科（生徒の多様なニーズに答えるため）

(2) 年次ごとの計画

平成14年度

テーマ

生徒一人ひとりが自ら学び、学び合う喜びを実感できる学習指導
～個に応じた指導の工夫改善を通して～

仮説

個に応じた指導により、生徒自ら学ぶ姿勢を基盤とした授業を創造することで、基礎的・基本的な内容が一層定着し、学び、学び合う喜びが得られる学習ができると考えた。

研究内容・方法

- ア．少人数指導や選択教科指導のあり方を探り、改善する。
- イ．総合的な学習の時間を充実させ、自ら総合的・関連的な学習に取り組みさせることで自ら学び考える力、学び方や考え方、問題の解決や探究に主体的・創造的に取り組む態度などを育てる。
- ウ．各教科の評価と指導の一体化をはかるため、評価規準・基準を作成し、評価方法を工夫改善する。

平成15年度

テーマ

生徒一人ひとりが自ら学び、学び合う喜びを実感できる学習指導
～個に応じた指導の工夫改善を通して～

仮説

個に応じた指導により、生徒自ら学ぶ姿勢を基盤とした授業を創造することで、基礎的・基本的な内容が一層定着し、学び、学び合う喜びが得られる学習ができると考えた。

研究内容・方法

- ア．少人数習熟度別学習の指導体制や自己評価のあり方、評価問題について研究する。
- イ．選択教科の補充・発展的教材の開発や評価について研究する。
- ウ．『自学』（自らの学習課題を考え、家庭学習の計画を立てる時間）の充実を図り、家庭学習を習慣化させるための研究を行う。

平成16年度

テーマ

生徒一人ひとりが自ら学び、学び合う喜びを実感できる学習指導
～個に応じた指導の工夫改善を通して～

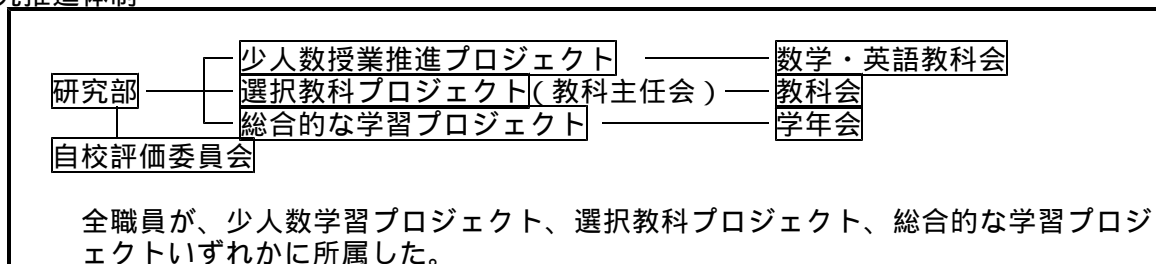
仮説

個に応じた指導により、生徒自ら学ぶ姿勢を基盤とした授業を創造することで、基礎的・基本的な内容が一層定着し、学び、学び合う喜びが得られる学習ができると考えた。

研究内容・方法

- 1・2年時の成果をふまえて更なる学習指導方法の工夫・改善を図り、基礎的・基本的な内容の徹底を図る。1・2年時の研究の実践とまとめ。

(3) 研究推進体制



平成15年度の研究成果及び今後の課題

1. 研究成果

(1) 少人数コース別学習

個に応じた指導体制の充実

平成14年度から少人数コース別学習を数学・英語科で実施してきた。質問を含めて生徒の発言が増え、学習集団としての一体感が高まった。しかしながら、極度に学習意欲の低い生徒への「個に応じた指導」の更なる改善が課題として残った。基礎コースでは授業以前の生徒指導上の問題も起こった。そこで、本年度は学級集団を大切にしたい少人数コース別指導体制をしくみ、より少人数化をはかり、より「個に応じた指導」ができやすい体制を整えた。

平成14年度 1・2学年－5クラスを6コース、3学年－2クラスを3コース
(各コースに各クラスの生徒が混在し、人数も多いコースでは30名をこえた。)

数学・・・1学級を一般コース1クラスと基礎コース1クラスに(2・3年)

2学級を一般コース2クラスと基礎コース1クラスに(1年)

英語・・・2学級もしくは3学級を抱き合わせて

2学級を一般コース2クラスと基礎コース1クラスに

3学級を一般コース3クラスと基礎コース1クラスに

一般コースは数学・英語いずれも原級で構成されている。

学級集団を母体としてコース別少人数授業をしくんだため、落ち着いて授業に取り組めるようになり、生徒自身の選択による途中でのコース変更も容易になった。また、より少人数化が図れたため個別の指導時間が増え、「個に応じた指導」がより行われるようになった。さらに、単元によってTT習熟度別コース授業・一斉授業等の授業形態が工夫できるようにもなった。とくに、1学年の1学期は習熟度コース別授業を行わず、TTの授業形態をとったため、生徒の実態把握がしやすくなった。

自ら学び自ら考える力を育てるために

ア. 数学科の実践から

問題解決の過程に面白さを見出し、見通しを持って追究できる数学的活動を多くするような授業を構想した。

基礎コースでは、スモールステップをこころがけた。問題提示の場面で、解決の見通しを持ちやすい(できそうだと感じる)問題提示を工夫した。図形の相似を調べる場面で、どの辺の長さを既知量として与えるかを工夫することで、追究意欲を高められた実践例もある。

一般コースでは、解法が複数ある問題の提示に努めた。一例を挙げると、台形の中に平行線を引いた図のXの長さを求める問題で、学習カードを工夫し、できるだけ多くの解法を考えさせた。グループ学習の時間を確保したことも効果的であった、生徒が問題解決の過程に面白さを見出すことができるようになり、自ら追究する姿勢の高まりが認められた。

イ. 英語科の実践から

「自分の考えや気持ちなどが聞き手に正しく伝わるように話す力を高める指導はどうあったらよいか」をテーマに英語学習の基盤ともなる「音読」を大切にしながら生徒が話したくなるような、より身近な題材で必要感のある場面設定を心がけた。公開研究授業では、自分の身近な人物の写真・絵などを用いて、家族や友達を紹介する活動を仕組むことで、英語の三単現の表現を身につける学習を展開したが、多くの参観者からその有効性を評する声が聞かれた。

個に応じた指導の充実

ア. 数学科の実践から

『問題提示の場面』『問題追究の場面』『定着の場面』の3場面に分けて研究を進めた。それぞれの場面で、基礎コース・一般コースそれぞれの指導方法や教材を考えた。

基礎コースでは具対数で考えられたり、具体的な操作ができる問題を中心に追究させ、定着の場面では個別指導を多くした。一般コースでは出来るだけ多くの解法を取り上げられるようにしたり、友の考えに学ぶ場面（グループ内の話し合い・全体発表）を設けるなど、コースに応じた指導方法の工夫を心がけた。

イ．英語科の実践から

話すことに苦手意識を持っている生徒に対して、話す内容についての情報の整理（話し方、how to speak）（何について話すか、what to speak）をして、さらに音読 パターンプラクティス show and tell 自己表現というスモールステップ指導方法の工夫をした。

（２）総合的な学習

総合的な学習「軽井沢学」の時間の運営

本校では、生徒自ら課題を見つけ、自ら学び、考え、主体的判断のもとに問題の解決や活動に取り組む総合的な学習を試行錯誤しながら実践してきた。その結果、総合的な学習は、図書館やインターネット、指導者にたよりがちで、自らの足で課題を求め、肌で感じる実際の場面が創造しにくい、つまり生徒たちによる課題の設定が実は容易でないという難題に直面した。それは行き着くところ、生徒の問題でなく、時間的保証や機会の設定が不十分であったり、教科書による一斉授業に慣れ総合的な学友に不慣れで、生徒たちによる課題設定を支援していく手だてをほとんど持ち合わせていない教師側に問題があることが分かってきた。そこで、本年度は「軽井沢学」の時間に生徒ができるだけ校外に出たり、地域の方を学校に招いたりして、地域の「人」・「物」・「こと」に出会い、その中で問題を見つけられるような学習を志向した。また、具体的・実践的活動を可能にするため、外に出て活動する学級・学年は、午後の時間を弾力的に使えるような日課とした。更に全学年終日3日間「軽井沢学」に使える時間を設定した。

体験を通して自ら学び自ら考える力を育てる

総合的な学習は、「体験的な学習」を含んだ問題解決学習である。ただ単に体験だけをすればいいというものではなく、あくまでも生徒が「自ら課題を見つけ、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、問題をよりよく解決」していく学習である。従って、体験的な学習は問題解決のプロセスの上に位置づけられるべきと考えた。その位置づけの一つは「自ら課題を見つける」ために、体験学習を行うことである。1学年の総合的な学習の導入部分で「軽井沢の良さを発見する体験学習」を行ったのがこの立場。このとき生徒たちが「課題を見つける」ことができるように教師は十分な教材研究を行った。自分の目で見、直に触れて考えることのできる体験学習を通して生徒たちはこれをやってみたい・調べてみたいという欲求が出てきた。もう一つは、課題を追究するプロセスで「課題を解決する」ために、実際に体験したり、取材で体験先を再訪問し疑問をぶつけてみるといった教育活動を仕組むことが必要であると考えた。軽井沢の伝統工芸である軽井沢彫りについて調査している生徒が、軽井沢彫りに携わっている人々の仕事場に出向き、自分達も軽井沢彫りを体験しながら、課題解決の糸口を見つけ、学ぶことの楽しさを実感していくという学習も展開できた。

（３）選択教科

個に応じた指導体制の充実

平成14年度（開設初年度）開設の講座

選択 国語（1）、社会（2）、数学（2）、理科（1）、英語（2）

選択 音楽（1）、美術（1）、体育（2）、技術（1）、家庭（1）

3学年は選択より各2教科、計4教科選択。2学年は各1教科、計2教科選択。
補充的な学習の講座を中心に開設

平成15年度開設の講座

選択 国語（2）、社会（2）、数学（2）、理科（1）、英語（2）

選択 音楽（1）、美術（1）、体育（2）、技術（1）、家庭（1）

学年内ガイダンスを充実させ、必要感に立った選択になるように指導した。また、昨年度の反省を生かし、応用発展的な学習の講座を増やした。

（国・社・数・英で2講座のうち1講座を発展的な学習の講座に）

3学年の選択を1教科選択に（週2時間）、選択、2学年の選択は昨年度のまま。

（週2時間の時間の確保により、取り組める教材の幅が広がった）

個に応じた指導の充実（発信型の学習の構想）～選択国語の実践から～

本校の生徒は、毎日の漢字練習には熱心に取り組む生徒が多いが、漢字のドリルテストに成果として現れてこない生徒も多い。これは、漢字練習がやらされているものであって、自分の課題になっていないことの現れであろう。漢字のような基礎学力に関しても、「課題を持つ」

ことが大切であると考えた。選択国語でも漢字練習に取り組みせたら、本校の生徒の実態からいって時間いっぱい熱心に行うだろうことも予想できる。しかし、それが必ずしも確かな基礎学力につながらない。

生徒たちの将来において「生きて働く力」を養うためには、あたえられた課題を受け身的にこなしているだけでは不十分である。そのための有効な方法として自分から発信する学習経験が考えられる。そこで、選択授業で「発信型の学習」の構想を考えた。教科の時間で学習した「日本語を考えよう」の単元を再度設定した。筆者の思いをとらえさせた後、そこから、自分の日常生活を振り返り、言語生活での課題を持たせ、その課題について図書館やインターネットでの調査活動や友達との会話などから情報を集めた。更に調査していく中でいくつかの情報を選択し、友人との意見交換をした。それをパワーポイントを使って構成したり見出しを考えたりし、最後はまとめとして自分の伝えたいことを明確にしながら発表を行った。この活動を通して生徒は、相手に伝えたいという意識を持ち、意欲的に活動に取り組んだ。見出しを付けたり、伝える相手を意識しわかりやすく伝えようと取り組んだことで、要点化する力や構成を考える力、発表の基礎能力が育成されたと考える。補充的な学習からの脱却をはかり発展的な学習へつなげる選択教科のあり方について、今後も研究を深めていきたい。

2. 今後の課題

(1) 個に応じた指導のための教材の開発

本年度、コースに応じて教材開発を進めてきた。本年度の研究を更に進めて、読み、書き、計算の能力やコミュニケーション能力、情報活用能力などの基本的な能力と関連させた教材を開発していきたい。

(2) 個に応じた指導のための指導方法・指導体制の工夫改善

数学・英語で行っている習熟度別少人数コース学習ばかりでなく、生徒の実態に応じて様々な指導体制を考えていきたい。また、生徒自身のコース選択の機会を増やしていきたい。

(3) 「指導改善のための評価」のあり方

評価を通じて、教師が指導の過程や方法を見直し、より効果的な指導が行えるように、現在の評価規準・基準及び評価方法について見直していく。

・学力把握のための学校の取り組みについて

定期的な学力調査（CRT）の実施（年1回・・・1月29日実施予定）
昨年度より実施している。客観的な学力を分析し、前年度と比較することで学力向上フロンティアスクールの成果を確認し、今後の課題を明確にするために実施。

・フロンティアスクールとしての成果の普及について

佐久教育事務所主催 学力向上佐久地区研究協議会で佐久地域の学校に報告(平成15年6月23日)
学力向上フロンティアスクール公開授業研究会で佐久地域の学校(小・中・高校)・地域住民に授業公開及び授業研究会を行う。 <数学・英語の少人数授業> (平成15年10月30日)

次の項目ごとに、該当する箇所をチェックすること。(複数チェック可)

- | | | | |
|----------------------|---|--|--------------------------------|
| 【新規校・継続校】 | <input type="checkbox"/> 15年度からの新規校 | <input checked="" type="checkbox"/> 14年度からの継続校 | |
| 【学校規模】 | <input type="checkbox"/> 3学級以下 | <input type="checkbox"/> 4～6学級 | |
| | <input type="checkbox"/> 7～9学級 | <input type="checkbox"/> 10～12学級 | |
| | <input type="checkbox"/> 13～15学級 | <input checked="" type="checkbox"/> 16学級以上 | |
| 【指導体制】 | <input checked="" type="checkbox"/> 少人数指導 | <input checked="" type="checkbox"/> T・Tによる指導 | |
| | <input type="checkbox"/> その他 | | |
| 【研究教科】 | <input type="checkbox"/> 国語 | <input checked="" type="checkbox"/> 数学 | <input type="checkbox"/> 理科 |
| | <input checked="" type="checkbox"/> 外国語 | <input type="checkbox"/> 社会 | <input type="checkbox"/> 美術 |
| | <input type="checkbox"/> 保健体育 | <input type="checkbox"/> 音楽 | <input type="checkbox"/> 技術・家庭 |
| | <input checked="" type="checkbox"/> その他 | | |
| 【指導方法の工夫改善に関わる加配の有無】 | <input checked="" type="checkbox"/> 有 | <input type="checkbox"/> 無 | |